
ゴッド・アイズ《水晶の剣》

月島愛夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッド・アイズ《水晶の剣》

【Nコード】

N9985C

【作者名】

月島愛夜

【あらすじ】

ここは異世界！。温厚な性格の人間なのか、人外なのか分からない青年神楽と、喧嘩も強くて短気な悪鬼の類である白夜、その他の仲間と一緒に、国の王、瑠樹亜を倒すために旅に出る。神楽の運命とは…。『自分がやらなければいけない事』と『やりたい事』あなたはどちらを選びますか？中学生が描く、不思議な異世界ファンタジー。

01・神宮の儀式 壱

鳴り響く鐘の音は、一人の男を迎える、儀式の合図である。そしてその儀式を受けるもの、神宮神楽はため息をついた。

場所は、神宮という族の敷地。とても広く、そこに住んでいる者でさえ、迷ってしまうほどだ。

今年はじめ、神宮の当主である神楽の叔父が亡くなった。その後を継ぐのは誰？ということになり、多数決で神楽に決まったのだった。なんとたつて、『人の子』ではないらしいから。

本来この国では人間というと、黒い髪に黒い瞳と決まっている。それ以外の色は人外。金と青は善。紫は悪ともなっている。

そして、神楽は漆黒の髪には似合わない、透き通った、まるで水晶のような青色の瞳。もちろん、人間なのだ。髪は黒いものだから。しかし、瞳は青。このことに神楽はとても悩まされていた。それが、このため息の一つの原因でもある。

「神楽様。式の用意ができました。即刻大会場へとお越しく下さい」

一人の爺が神楽の部屋の扉をゆっくりと開け、そうつぶやく。「わかった」

また新たなため息を残し、自分の部屋から、重々しい雰囲気をはっしながら出て行った。

今回の儀式はもちろん、当主を継ぐ儀式。それなりの、いや、神宮一族の全権を握れる立場に立つのだ。神楽には不安の言葉しかなかった。

確かに、瞳が青いことで、何か力があるとは思いかもしれない。しかし、自分はただの人間だと神楽は思っている。剣術もろくにできないし、特別頭がいいわけではない。そんな人間が当主になんかなくていいのだろうかと思うと、気が重くなるのだ。

白い装束衣装を身に纏い、神楽は顔を上げ前進する。大会場の一

番前に神楽が現れると、会場に集まった人間達はわめいたりして騒ぎ出す。

「神楽様！当主、おめでとうございます」

「心からの祝福を」

「キヤー神楽様！」

と、さまざまに叫ぶ。隣にたった爺が、手に持った鐘を鳴らすと、自然と周りは静かになっていく。

「神宮神楽様。今日、九の刻を持ちまして、神宮一族二百代目へお成りになりましたっ」

爺が顔を綻ばせてさういうと、いったん静かになったのもつかの間、周りは先ほどよりも声を上げて喜ぶ。その様子を見てみると、神楽も少しだけ嬉しいような、恥ずかしいような気持ちにさせられた。

なんとたつて、神楽はまだ十八歳なのである。神楽の叔父も、十九歳という若さで当主となった。それを超える歳での当主は全一族でも初めての事だった。

神楽は少し喉を鳴らし、少し手を上げる。すると一斉にまた静かになる。

「えーっと、ありがとうございます。神宮の当主、ということはい責任を負わなければなりません。不安はあります。しかし、この全一族の中で上位の力を持つこの神宮の当主になれるという嬉しさの方が、大きいです」

笑顔でさういうと周りは大喜びだ。

神楽は神宮の一族の中だけではなく、他の一族の中でも有名である。『氷色のそよ風』。瞳は氷のように冷たい、水晶のようだが、とてもやさしく、温厚だという意味である。その名の通り、初めて会った人間でもまず第一印象で神楽を嫌う奴はいない。そのなんとも珍しい色と、美貌に瞳を捕らえられてしまうのだ。

02・神宮の儀式 貳

「神楽様！」

一人の女が儀式の後、寄ってきた。

「由。どうしたの」

この女の子は神宮由。現在十六歳の、神楽の親戚である。黒く長い髪に、黒い瞳。真正正銘、『人の子』である。

「おめでとう、神楽様。さっきは個人で言えなかったから・・・」

恥ずかしそうに手を組んで、少し上目遣いでいう由は、本当に可愛らしい。神楽も、そう思う。

「ありがとう、由。嬉しいよ」

微笑んでそういうと、由も微笑を返す。

「でも、なんか寂しいな」

「なんで？」

「だって、なんか神楽様が遠くに行った気がして」

確かに。一族の当主なのだ。遠いのは当然。だが、神楽は別にそんな事、どうでもいいと思っっている。当主だから、と言って行動や言動を慎まなければならぬなんて決まりは無い。

「そんなことないよ、俺は俺だから。それに、以前みたいに神楽って呼んでもいいよ」

由は苦笑しながら首を左右に振る。

「神宮の、決まりだから」

だれが決めたものでもない。だが、最低限守らなければいけないもの、があるらしい。

神楽はそっか、と小声でいい、由の頭をやさしくなでた。

「わかったよ。でも覚えといてね。俺は別に特別偉くなったわけでも無いし、由を置いてきぼりになんかしないよ。いいね」

由は笑顔で頷く。そして、手をふりながら足早に去っていった。

神宮の当主とは、個人的に長話をしてはいけないという決まりもある。

るらしい。ばかげたことだと神楽は呆れる。なぜ話をしてはいけないのか、疑問に残る。

扉が静かに開く音がした。この気配は……。

神楽は嫌な予感を覚えた。いつも『あの人』が現れるときに感じる、独特の空気。殺気が少し混じったような。

神楽は扉の方向を見、軽く会釈をする。

「どうか致しましたか、母上」

漆黒の美しい髪を丁寧^{トコ}に結び、まるで人をさげすむような目で神楽の母、遠弧は神楽を睨む。

「当主、おめでとう、神楽様。本当に立派になって」

にこりとも笑いはせず、まるで人を食い殺そうというぐらいの気迫で喋る。

「ありがとうございます」

神楽もまた、笑いはせず、ただ礼を言う。

「本当……母親にあなたを様付けさせるだなんて。ずうずうしいつたら。なんであなたなんか生んだのかしら。この、化け物」

また始まった。目があったら、

『なんであなたを生んだのかしら』

『よらないで頂戴、化け物のくせに』

『人間じゃないのに、なぜ神宮にいるのかしら』

と、文句たらたらだ。それしか言えないのかと思うほど、何回も言うってくる。

「すいません」

神楽は淡々とそつつぶやく。それがまたむかつくのか、遠弧は羽織っている布を引っぺがす。

「沙里那。来なさい」

神楽の部屋の扉の方を向き、叫ぶ。その名を聞いた瞬間、神楽はさらに疲れを覚えた。

「なあに？お母様」

そついい、扉を勢いよく開けた少女は、神楽と目が合うとにやりと

意地悪そうな顔をする。

少女の名は沙里那^{サリナ}。十五歳の神楽の妹である。とにかくわがままで、猫かぶりで、母親のご機嫌を伺って生きている、とんでもなく面倒くさい存在だ。

「本当、同じ兄弟なのにどうしてこんなに違うのかしら。あなたは憎たらしかったら。それに比べて沙里那は本当にいい子ね。どうして当主にならなかったのかしら」

また愚痴を言い出す。沙里那をもってきては、『あなたに比べて沙里那は・・・』と始まるのだ。

本当、いい加減うんざりだ。それに、傷つかないわけがない。一応『人の子』なのだから。

「まったく、本当にやめて欲しいわ。あなたなんか、居なくなればいいのよ」

その言葉を残し、遠弧はさっさと消えていった。しばらく神楽の方向を見た沙里那は、意味深に微笑みながら、バイバイ、お兄様、とわざとらしく様付けをして遠弧の後を追っていった。

「なんだかなあ」

誰にも打ち開けることができないこの思いを、神楽は森の草木に語りかけるようにつぶやいてみる。せめて、コメントはしてはくれな
いけれども、唯一聞いてくれる物だ。

「俺はどうしたらいいんだよ」

消える、といわれてはいそうですかって聞ける立場でもない。今は
この一族の当主なのだから。

これだったら、なる前に消えておいたほうがよかった。だが、母
親は別として、神楽には慕ってくれるものはたくさんいる。それを
捨てて、消えるなんていう勇氣もない。

儀式の際、当主だけが受け取ることができる、『水晶の首飾り』
を手に持ってみる。重さもあつて、細工も細かいとても価値があり
そうな首飾りだ。

だが、神楽にとってこれはただの『首飾り』だ。別にこれが欲し
いから当主になつたわけでもない。

当主になつた理由なんて、元々ないのだ。他のものが、当主は神
楽様と決めつけ、そして勝手に、決めた。それだけのこと。

「頭痛い」

神楽は木に寄りかかり、頭を抑えてみる。しかし、どうにもならな
い。そう、もうなつてしまったのだ。『当主』に。一族を背負わな
ければいけない立場に。後悔、なんて山ほどある。十八歳のいう身
で囚われの身になってしまった。これなら、もっとやりたいことを
しとけばよかった、と思つてみるが、どうせ出来はしない。あの母
親の監視の元にいるかぎり、自由なんてなかった。

言葉にできない苦しみと、もう誰も助けてくれる人間はいないの
だという絶望のふちに、神楽は立たされていた。

「なっさけねえ顔すんなよ」

どこからか、声が聞こえた。男の声。神楽は木から離れ、辺りを見回してみる。

「おいおい、神宮の当主様だろ、あんた。気配もつかめないのか？」

少し馬鹿にされたのだと神楽は思い、拳を軽く握る。

「うるさい。姿もあらわせない奴に言われる筋合いはない」

「別に現してもいいけど、お前腰抜かすんじゃないぞ？」

そう声の主が言った瞬間、森の中の草木が揺れ、音を立てて騒ぎ出す。神楽は木から離れ、地面の上に立つ。いくら力がないとは言え、この感じはけっこう大物だと感じる。しかも、『悪』の力が強いなとも思う。

だが、どうとでもなれ、という風に考えている神楽には、必要のない。ここで本物の化け物が出てきて殺してくれたら、誰に恨まれることもなく、消えれる。そしたらあの母親は、声を上げて喜ぶのだろうかと思像すると、少し腹が立つ。

現れたのは、黄金の長い髪を腰まで垂らし、白い着物のような服を着た、青紫の瞳をした若い青年であった。神楽より、十センチほど背が高い。顔も人間離れしていて、思わず口を閉じるのを忘れてしまうほど、それは見事であった。まさに、『完璧』という言葉がふさわしい。

自信に満ちた、その青年は、俺は、俺だ。これですべて。それに文句があるのかと問うように、神楽の前に立ちはだかる。それは怖いという感じよりも、正反対のもの、と認識してしまった。『こちらの方が、綺麗な生き物』とでもいうように。

そう認識してしまった自分に対して、神楽は馬鹿馬鹿しいとさえ思う。向こうは真正正銘、『悪』なのに。

「どうだ。びびったか」

まるで小さい頃よく言った言葉だと神楽は思う。神楽は苦笑いしながら、

「まあね」

とだけ言った。

「ほう、さすがは神宮の当主だけあるな。肝が据わっているらしい」
それは違うよと思いつつも、もう反論する気力はない。この目の前の本来なら敵になるだろう男も、自分を殺そうとは思っていないらしい。

「どうした、神宮の当主。俺を殺さないのか」

「殺せるはずがないだろ。あんた、強そうだし。それとその当主ってやめてくれない？神楽って呼んで」

その人ではないものは首をかしげ、さも驚いたげに訊ねる。

「それは、名か」

「そうだけど」

そう答えると、人ではないものは、ほう、とだけいい、神楽の隣に行く。少し警戒しながらも、神楽は動こうとはしない。

「そなた、本当に俺様を殺そうとしていないのだな。神宮一族の間が、悪のものに名を教えるなど、ありえないことだ」

その言葉を聞き、神楽は苦笑する。

「人間じゃ、ないかもね」

その言葉を、人ではないものは重く受け止めたらしく、そのまま黙る。そして数秒沈黙が続いた後、急に喋りだす。

「俺の名は、^{ハクヤ}白夜だ」

03・森で 吉（後書き）

白夜のほづが、神楽の母親より人間らしいですね。

04・森で 貳

「お前も、変わり者だね」

神楽が、少し驚きながら、白夜にそういうと、白夜は苦笑する。

「お互いにな。それより、なんであんな顔してたんだ？」

白夜はなれなれしいなとも思ったが、なんだか人ではない、ということが負担ではなく、逆に話しやすく感じる。

「いや、ちよつと・・・」

「なにかあつたのか？当主になりたくなかったとか」

「・・・なぜ分かる」

白夜は当たつたの、と首をかしげる。

「まあ、無理やりされたっていうか」

「なりたくなかつたのか。俺だつたらなりたくなって思うけどねえ」

そりゃあ、普通は思うだろうけど。それだけの実力があつたのならば。

「俺は、お前が神宮の当主でいいと思うけど。なんか、前のおっさんは気に喰わないし」

神楽はその言葉に疑問を感じる。

「おっさんって・・・叔父さん知ってるの」

あつけらかんと白夜はそうだけど、というので、こんな悪の類のもので、知っているのだと関心、いや、驚く。

「ああ。あいつはやな奴だよ、なんせ、俺の嫌いな奴に媚売つてたからな。それが気に食わなかった」

叔父さんが媚を売っていた相手なんていたのか。しかも、あの自己中心的な叔父さんが、媚を売るなんて驚きものだ。

「誰、それ」

聞いてみると、白夜は黙る。聞いているのか、それとも無視しているのか分からないが、言いたくないことなのかもしれないと、神楽は話題を変える。

「あのさ、白夜さんは何族なの」

唐突すぎるかと思っただが、白夜は笑顔で答えてくれた。

「俺？俺は・・・さあ。まあ、悪鬼の類ではあるけどね」

やはり、と神楽は笑った。

「んでさ、その首飾り、何？」

白夜は指を指してそう問う。

「これは・・・」

つい答えようとしてしまい、神楽は口をきつく閉める。おもわず悪鬼の類に話すところだった。

「なんだよ、答えてくれよ。別にいいじゃねえか、これぐらい」

だだを捏ねるように白夜は神楽を見つめる。どうもこの悪鬼にみつめられると苦しくなる。それと同時に、別にいいかという安易な考えが脳を横切る。

「・・・これは儀式の時に貰う奴。神宮に伝わる巻物と一緒にもらった。当主の印、みたいな感じかな」

なぜか神楽は話していた。わかってる、この男が敵の一種だったことぐらい。

「へえ。それでその巻物って何」

今度は巻物の方に興味が湧いたらしく、白夜は先ほどよりも顔を綻ばせて、安心してきいているような顔をする。今なら、あまり剣術が得意ではない神楽でも、倒せるのではないかと思うほどだ。

「・・・巻物・・・は、俺達にしか解読できないように書いてる呪文みたいなもの」

あまり詳しくは答えないようにする。この次の質問が、とても予想できるものだったから。

「どんな事が書いてるの」

やっぱり、とため息をつく。この悪鬼、本当に自分が神宮の人間、すなわち神に仕える一族だと言うことが分かっているのだろうか。

悪鬼ならさつさと殺すだろうから。

別に殺して欲しいわけでもないが、殺さないことに疑問を感じる。
「あのね、俺が神宮だって分かってる？白夜さんとは敵なのかも知れないよ。いや、本当に敵なんだから。もし俺がここで刺したらどうするの」

白夜はきょとんとし、目を大きく開ける。青紫の瞳は、濁りもしなかった。

殺気などが芽生えたりすると、瞳の色が動く。これは大昔から言われていることだ。だから一応防御するために白夜の瞳を見ていたのだが、まるつきり動かない。

「だって、そなたは刺さないだろう」

その言葉は、神楽にとって信じられないものだった。本当に、悪鬼なのか。そして、その悪鬼を前にして一度も刺そうともしなかった自分に、はつきり言っただけだ。

白夜は何も疑おうともしていなかったのだ。確かに殺気も出していなかったけど、悪鬼なら……。

その先の言葉を頭に浮かべようとして、やめた。

『悪鬼なら』。この言葉が、妙にこの白夜には似合わない。まるで神楽自身が、この目の前にいるのは悪鬼のだと認識したいように、自分で唱えていただけだった。

『この男は悪鬼で、俺は人間』。そう、思いたかったのかもしい。

神楽は情けなくて、髪をクシャリとつかんでみる。今の自分は情けなく、恥じるべきものだと考えてしまう。白夜は顔色を変えた神楽を、心配そうに見つめながら、声をかけるかかけまいか、迷っていたようだ。

だが、次の瞬間神楽は顔を上げ、白夜を見る。

「教えてやるよ・・呪文。どうせ、解けはしないだろうけど」
そうつぶやいて、神楽は語りだした。

「光り輝く元にあり、水晶のごとく透けてみて 中に見えるは宝玉
輝く天の向こうで。水晶の剣持てれば 天を見つめ 仰ぎける。
草木植えれば森と成 水汲みければ 海となる。すべては幻か 決
めるは天 それは我と成。運命の導き 否か？ 青・紫・金。す
べてが木となり根となれば 我は 天となる」

それは聞いた後の白夜は、まるで意味が分からないと首をかしげ
た。

それを見た神楽は、少し安心する。

「なんだよ、今の。巻物に書いてある呪文か。まったく意味が分
からない。特に・・セイ・シ・コン？だっけか。あれなんていうん
だ？」

「・・・青・紫・金セイシコンっていうんだ。要するに、青と紫と金だよ。
この世の中の、人外のものを示しているんだ。これが解読するには、
ちよつと技が必要でね、簡単には解読できないようになってる。
それだけ、大事なものなんだ・・・」

このもっている首飾りよりは、遙かに大事。なんたって、この呪
文が解けたら、神宮の幻の『あれ』が手に入るのだから。

「難しいな。俺はあまり頭がいい方じゃないからさ。よく分からな
い」

白夜は黄金の髪を手を絡め、まるでいたずらをした後の子供のよう
な顔をした。

「それに、大事なんだつたら、俺なんかに見せてよかったのか」
神楽は少し肩を震わせる。なぜこんなに簡単に喋っているのかは
知らない。自分でも分からない。

「俺が決めたことだ。別に・・・誰に・・・なんといわれようと、俺
の成すべきことに口は出させない」

白夜は神楽が言った事に、反対はしなかった。それどころか、そ
うか、と笑っていた。

本当に、おかしな奴だと神楽は改めて感じる。

だが、急に白夜の顔つきと目つきが鋭くなった。何かに神経集中させているようで、どうしたのか言おうか迷ったが、聞こうとした瞬間、白夜の方が語りかける。

「・・・敵が、いる。『あいつ』の使いだ。ちつと厄介だぜ。お前のその首飾り、狙ってるんじゃないか」

神楽はその言葉にすぐさま反応し、辺りを見回す。確かに。こんなことぐらいなら、分かる。『殺気』が混じった、殺し、もしくは盗みを働く前の空気だ。

「敵は五人だ。おそらく、奴らは俺が俺だと知っている。そして、お前も。どっちも倒す気にいるんだろうな。馬鹿な奴らだ」

さつきからあいつ、だの奴らだのと、妙に知っている風にいうので、神楽は聞きたくなかった。が、それどころじゃない、と思い返して首をふる。

白夜の金色の髪がふわりと宙に舞う。青紫の瞳が、より一層濃くなつてゆく。

「神楽」

「何」

呼び捨てか、と思いつつも、神楽は冷静に話を聞く。

「自分の身、守れるか？ちよつとだけ」

「ま、ちよつとだけなら。これでも当主だしね」

「頼もしい限りだ」

白夜は苦笑いし、すばやく顔つきを変える。来る。そう白夜がつぶやいた時には、数人の黒い服を着た刃物を持った男達が、上から落ちてきた。

05・主の使い

上から落ちてきた男達は、剣を構えて持ち、神楽と白夜を交互に睨む。鼻まで隠した布を少し上げたり下げたりを繰り返して、相手との距離をすかさず図ろうとする。

プロだ、と神楽は感じた。この空気と、そして狂いのない計算。落ちてくる場所まで、まるで分かっていたかのように、その場所に吸い込まれていた。

「なんだ、てめえらか。また俺を追いに来たのか・・・それとも・・・」

白夜は鼻を鳴らし、相手を上から見下す。相手はなんせ顔が半分以上隠れているから、表情は分からないが、おそらく少しは頭にきているだろう。しかし、相手もこの白夜がどれだけ強いのかを知っているらしい。攻撃はしてこない。

「今回は貴様は関係ない。そのお隣にいる、神宮の当主である、神楽様。あなたに少しばかり用がありました」

一人の男が目を細めながら笑いかける。おそらく笑っているのだろう。その男の瞳は、『紫』。

その男が一步前に出た時、白夜は思い切り手に持っていた剣をふる。それがあまりに行き成りのことだったので、つい神楽はびびってしまふ。だがその黒い服を着た男は、白夜の振った剣を軽々と避ける。

「だからお前には用はないって。そうカリカリすんなよ」

男は白夜にさっきの微笑みのまま、そう語る。だが白夜は思いつきり恨みのこもった目で、その男を睨み続けている。

「おっと忘れていましたよ。これは失礼致しました」

そのやけに丁寧な物言いの男は、自分の顔に巻いた黒い布を取って、髪の毛を整えながら首をふる。

その男の瞳は白夜よりも濃い紫の色で白い髪をした、若い男だった。

他の黒服のものには感じられないオーラが感じられる。多分他の奴らは人間だろう。

「私の名は、灰楼ハイロウと言います。以後、よろしくお願いします、神楽様」

にこりと微笑んだ灰楼は、敵なのかどうか、混乱してしまう。だが白夜の睨んでいる顔を見ると、やはり敵だと思い返す。

「あなたの目的はなんなんですか。しかもご丁寧に剣まで持って」「ああ、これはあなたの隣にいる悪鬼をどけるためのものでして。決してあなたを傷つけようとかはおもっていませんよ」

やけに説得力がある。

「それで、あなたの要求は」

「うん、肝の据わっているお方だ。すばらしいね。では本題に入りますしよ。実はですね、その首飾りを貸して欲しいのです」

唐突なお願いだったので、神楽は眉をひそめる。

「貸して・・・とは」

「少しばかりそれが必要なのですよ。私の主が・・・それを必要としています」

灰楼は白夜の方をちらりと見、微笑む。

「主、ですか。誰ですかそれ」

貸せるものではないが、一応参考までに聞いてみる。

「知りたいですか」

灰楼の瞳がかすかに動く。『瞳』が動いたんじゃない。瞳の中の色が、まるで絵の具が混ざったように動いたのだ。

微かにびくついたが、誰ですか、と冷静に聞く。

「国王、瑠樹ルキア様ですよ。国王のお申し出なので、まあ実際は拒否することは出来ませんが」

国王の、『瑠樹ルキア』。その言葉を聞いたとき、神楽は背筋が凍りついた。白夜もそうだ。さっきより恨みが濃くなったように、また剣を構える。

「おい、しゃべりすぎだろうよ、灰楼。ちよっと黙らないか」

白夜は剣から出た一筋の力を灰楼にぶつける。だがやはり灰楼の動きはすばやく、まるで瞬間移動のようにその一筋の力を避ける。

「だからさ白夜？お前にしゃべっていかないんだよ。そっちこそ首を突っ込むな。関係ないことなのだからね」

ため息をついて灰楼は白夜を見る。まるで哀れむように。

「それで、一応お聞きいたしますが、返答は」

灰楼はさっきの笑みに戻り、神楽に問う。だが、神楽は氷の瞳と言われる、青色の瞳を少し濁して、灰楼を睨む。

「悪いですけど、俺の前でその名前、駄目なんですよ。何が国王、だ。あなた方だって、俺が国王に逆らわず、すんなり首飾りを渡すって思っていたら、こんなに黒服の人いらないでしょ。渡さないなら力づくでも奪おうと思ってるんだろ」

神楽が睨むと、灰楼はしばし黙り神楽を見る。そしてにこりと微笑む。

「ほう、本当に面白い人だ。国王からのお願いだとしても、絶対に渡さない」と

「もちろんだ。これでも俺は神宮の当主。たとえ国王の願いだったとしても、一族の掟には逆らわない」

神楽のその言葉が本気だと思ったのか、灰楼はため息をつきながら後ろの黒服に合図をする。

「わかりました。それなりの覚悟をして待っていてください。今日のところは私が言っておきましょう。それに、白夜もいるしねえ」
ふふつと声を立てて、灰楼はお辞儀をする。また来ますという言葉も残して消えた。

もう二度と来るなと思いつながら、後ろに少し驚いた顔をして、立っている白夜の方を向いた。

06・神楽と王

「あんだ、国王のこと、嫌ってるのか」

しばらく見詰め合って、白夜が出した質問はそれだった。やはり、そこが一番気になるころらしい。

「まあね」

神楽は遠くを見ながらそう答える。

これ以上聞いてもいいのか、白夜は迷ったように神楽をちらりと見ながら、だが気になるのかまた問い出す。

「・・・なんで嫌いなんだ。嫌いというよりも、なんか恨みがあるみたいな顔をしてたけど」

神楽は苦笑しながらゆっくりと語る。

「ああ。恨みはあるよ。俺の・・・母親はね、俺を嫌っているんだ。俺のこの青い瞳が化け物みたいに見えるらしくて。そして、俺の母親は、あいつと手を組んで。本当は駄目なことだ。いくら王だからって、一族の中に足を突っ込んでほならぬ。けれど、俺の母親はそれを許した」

それだけを言い終わり、神楽はため息をつく。

「それで。あんだが嫌ってる理由は、それだけじゃないだろ」

やはり鋭い。

この後の事は、誰にも言っていない。ここで終わろうと思っていたのに。やはり、無理らしい。

「・・・そうだよ。それだけじゃない。むしろ、それはあいつを嫌っている理由にはならないしな」

少し、言葉につまる。脳裏に蘇ってくる、過去の自分。

白夜は少しためらったが、それでも聞くべきことだと判断したのか、それで、と小さく聞いた。

「俺達は、小さい頃よく遊んでいた、親友だった。神宮一族と、王族。この二つの一族は、この国の中でもっとも権力を持っている

ところだ。俺達の保護者はお互い、いいことだと言って俺達が遊ぶことを否定しなかった」

段々と蘇っていく、十歳の自分。あの頃の自分は、どうだっただろうか。ちゃんと、的確な判断を下していただろうか。

十歳にもなると、もう訓練を始めているところだ。剣術や、学問でも、すべてに秀でておかなければならない。

そういう世界に生まれてきたのだから。

「いつものように・・・遊ぼうと思ってた日。俺は待ち合わせの場所に、少し遅れてついた。寝坊してしまったんだよ」

《ごめん。遅れた》

「そういって、待ち合わせの場所に行ったとき、俺は声が出なかった」

《あつ、遅かったな、神楽・・・ああ、これ？別に気にしなくていいよ》

「あいつの足元にあったのは、無数の『死体』。それを見て、笑顔で蹴飛ばした」

あの時のことは、絶対に、忘れない。忘れることはできない。その時初めて思ったのだ。

怖いと。

昔から、自己中心的で、自分の言ったことが実現しないとすぐに怒るような奴だった。

瑠樹亜の傍に転がっていた死体は、近くの悪がきのものだった。きつと、そいつらが何かを言って来たのだろう。瑠樹亜も、神楽も、後ろ盾のおかげで逆らう奴は居なかった。しかしたまにいるのだ。

一族なんて関係ない、気に入らないからちよっかいを出そうとする子供。

「それで、あいつはなんていつてたんだ」

言葉を発してからしばらく時間が経っていた。白夜も少し青い顔をして、続きを聞こうとする。きつと、自分はこの白夜の顔よりもだいぶ青い、暗い顔をして話しているのだろうと、神楽は思う。

「なんで、そんな青い顔をしているんだって。こいつは気に入らなかつたから、殺した。それだけだつて。俺は何を言ったらいいのかわからなくて、ただその足に転がっている死体を見ていた。そして、その後俺は言つたんだ」

《瑠樹亜は、化け物だつたの》

「するとあいつは何事もなかつたような顔をして、もしそうだったらどうする？とまるでゲームをしているかのように言つて来たんだ。俺は、批判した。人は人を殺したら駄目だと。そしてお前は人なのだからと、十歳の俺は、なんとか言つたんだ。すると、あいつは顔色を変え、言い出した」

それが、神楽には忘れられない。

《人じゃなければ駄目なのか。化け物で何が悪い。体がもし、人だとしても、俺はきつと化け物になる。それにお前も、化け物じゃないか》

十歳の子供が言つた言葉ではなかつた。当たり前のようにそう言つたあいつは、神楽の方へと歩き出す。

《神楽も化け物だろう。こつちへきなよ。楽になるから》

「差し伸べられた・・・その手を、俺は却下した。手を振り払つてお前とは、違う。そういつて、俺は駆け出した。それから俺はあいつに会つてない。一回も」

そこまで言つと、神楽はゆっくりと深呼吸する。白夜は支えるように神楽の腰に手を回し、しっかりと抱きしめる。悪鬼の類なのだから、神聖なものに触つていい気分はしないだろうに。

「思い出さしてすまなかつた」

そう謝つた、金色の髪をした悪鬼の顔は、とても悲しそうで、それでいて美しかった。本当に悪鬼の類かと思うほどで、神楽はやさ

しく微笑んだ。

「疲れた。ちよつと寝かして」
「そういい、瞳を閉じていった。」

06・神楽と王（後書き）

久しぶりの更新です。校外学習に行ってたもんですからね。広島へ！関西の私達にとって、広島っていうとなんか遠い気がしましたあ。（しただけですが）

もうすぐ期末テストなんです。だから更新はちょっと遅れると思います。ですが、また書くので見てくださいね。
以上、愛夜でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9985c/>

ゴッド・アイズ《水晶の剣》

2010年10月9日14時18分発行